

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381209

研究課題名(和文) コンピテンスを関門学年に配置した歴史スタンダード・カリキュラムの開発研究

研究課題名(英文) The Development of Standard Curriculum of History arranged competencies at connecting grades

研究代表者

宇都宮 明子 (Utsunomiya, Akiko)

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：40611546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツの学習指導要領を検討し、ドイツでは初等段階と中等段階を接続するカリキュラムをどのように構築しているのかを明らかにすることをめざした。

本研究の成果の第1は、カリキュラムの再編を教育改革の視点から明らかにした点、第2は、事実教授や歴史科の目標が歴史意識の育成であると確定した点、第3は、ドイツのカリキュラムではコンピテンスが能力枠として機能していることを示した点、第4は、コンピテンスの到達水準が明示化されていることを提示した点、第5は、歴史意識の育成という歴史科の教育目的、コンピテンスという能力枠、到達水準が初等・中等段階の接続を可能にする要件であることを解明した点である。

研究成果の概要(英文)：This study elucidate the consistency of historical learning in primary and secondary school education in Germany through the analysis of history curriculums.

Through the analysis, the following five points become evident. (1)This study indicates a reorganization of history curriculums from a standpoint of educational reforms. (2)This study determines that the goal of historical learning in primary and secondary school education is the fostering historical consciousness. (3)This study shows that the competencies function as a framework of ability in history curriculums. (4)This study suggests that the attained levels of competencies are apparent in history curriculums. (5)This study clarifies that the fostering historical consciousness as the goal of historical learning, the competencies as a framework of ability and the attained levels of competencies is necessary conditions of enabling a consistency across primary and secondary school education.

研究分野：社会科教育

キーワード：社会科教育 歴史教育 歴史スタンダード・カリキュラム 事実教授 歴史科 コンピテンス 歴史意識

1. 研究開始当初の背景

日本では学力政策の転換がめざされているが、多くの課題を抱えている。課題の第1は、インプット操作型の教育政策から脱却していない点、第2は、能力の構築的な育成を考慮していない点、第3は、閉門学年の課題を解消することができない点である。

日本の学力政策の課題は広く認識され、欧米諸国の学力政策への関心が高まってきた。しかし、欧米諸国の教育改革や学力政策は、日本にそのまま適用できるわけではない。日本独自の学力観への実質的な転換を実現するためには、日本固有の政治的社会的背景を踏まえた歴史教育スタンダード・カリキュラムの開発が不可欠であるが、構築型のカリキュラムの開発を主眼とする研究はみられないというのが現状である。本研究ではこの現状を打開するという問題意識から、日本独自の歴史教育スタンダード・カリキュラム開発のための基礎的研究を実施するものである。

2. 研究の目的

本研究は、歴史教育スタンダード・カリキュラムを開発するための基礎的研究を実施することを目的とする。現時点においては、日本独自の歴史教育スタンダード・カリキュラムを開発することは困難である。それは、日本の生活科・社会科においてはその接続が十分考察されていないため、両科のカリキュラムを検討しても接続するための能力枠と到達水準を設定することができないからである。そこで、本研究ではドイツの事実教授と歴史科のカリキュラムの分析から、両科目を接続する能力枠と到達水準を明確にすることに重点を置き、この重点的研究を今後の日本の生活科と社会科における接続を可能にする歴史教育スタンダード・カリキュラムを開発するための基礎的研究と位置づける。

3. 研究の方法

本研究では、ドイツの学力観を明らかにし、その学力観に基づき、事実教授・歴史科で育成しようとする能力枠と到達水準を抽出し、ドイツの両科目における能力枠と到達水準の検討から日本独自の歴史教育スタンダード・カリキュラムの開発に向けた今後の展望を考察するという研究方法を採る。

4. 研究成果

(1) 近年のドイツにおける教育改革の現状

ドイツでは1995年のTIMSS、2000年のPISAの結果で生徒の学力不振が明らかとなり、多様な教育政策が採られた。その特徴の第1は、修学前教育の重視や全日制学校の拡充等、学校教育の施策展開の隙間になりがちであった領域に改革のメスを入れたこと、第2は、教育スタンダードや教員養成スタンダードの導入による質の保障政策の浸透である。

2002年にKMKで全国共通の「国家的教育スタンダード」の決議がなされ、作成された教

育スタンダードに基づいて各州の学習指導要領の内容が定められ、教育内容のスタンダード化が進行することとなる。KMKの教育スタンダードに該当しない教科でも独自の学会版スタンダードを作成する動きがみられ、スタンダード化が全教科において進行する。

この国家的教育スタンダードに基づく教育改革を進めるドイツでは、どのような学力観に支えられ、資質・能力の形成が図られるのか。これに関して、連邦教育省は「教育スタンダードとは、一般的教育目標が把握され、特定の中心的教育目標が達成されるために、学校が生徒に伝えなければならないコンピテンシーを指す。・・・このコンピテンシーは、課題設定ができるように、そしてまたテストによってしっかりと把握可能なように具体的に描かれている」と説明する。換言すれば教育スタンダードは、具体的な学習目標に置き換えることのできる教育目標、発達レベルを展望して生徒に習得することが求められるコンピテンシー、スタンダードの達成度(学習プロセスの結果)を実証的に検証するための水準という3つの要素から成り立つといえる。ドイツにおける「現代社会に求められる学力」は事象コンピテンシー、方法コンピテンシー、自己コンピテンシー、社会コンピテンシーという4つの柱によって構成されると考えられる。

国家的教育スタンダードは、教育課程の国家的統一基準として機能し、その標準化を強めるものである。当面は、KMKによる主要教科のスタンダード、諸州共同によるKMK教科以外のスタンダード等に基づくカリキュラムの標準化傾向は、さらに強まるであろう。

(2) ドイツにおける初等・中等連携カリキュラムの考察

ドイツでは1990年代まで初等段階と中等段階の歴史教育の接続が論じられることはなかった。しかし、1990年代以降の歴史教育学において、初等段階の歴史教育に関する新しい構想が結実する。この構想は2つの軸からなる。第1の軸は歴史意識である。1970年代以降、歴史教育学では歴史意識の促進を歴史教育の目標に位置づける。歴史意識とは、「現在の前史として現在の視点から新たに解明される過去は現在の理解に役立ち、さらに現在も未来の前史として今後の発展に寄与するとして、過去と現在と未来という3つの時代レベルを関連づける概念」であり、現時点でH.-J.パンデルのモデルが最もコンセンサスを得ている。第2の軸は、歴史文化である。子どもの既有的予備知識が授業の成果に影響を及ぼしており、子どもの生活環境の重要性が認識されるようになる。子どもと歴史文化との関わりを前提として、歴史意識の促進と発展をめざす歴史教育が意図される。

1990年代以降、歴史意識の促進という歴史教育の目標はすでに初等段階で初歩的な形で実現されなくてはならないということが

共通理解となった。1990年代以降の歴史教育学では、歴史意識と歴史文化を通して、初等段階の歴史教育の不可欠性が認められるようになったことで、初等段階と中等段階の接続が考慮の対象となった。歴史意識と歴史文化は従来の歴史教育のあり方を転換し、政治的陶冶に寄与しうるために、歴史教育学における中心的カテゴリーとなったのである。

以上から、ドイツの歴史教育では、1990年代以降、初等段階と中等段階の接続の重要性が認知され、接続においては、歴史意識と歴史文化を軸とすることでその実現可能性が保証されていることが明らかとなった。以下では、具体的なカリキュラムの分析から、初等段階と中等段階の接続を考察する。

ニーダーザクセン州事実教授・歴史科コアカリキュラムの分析

事実教授コアカリキュラムはコンピテンスを中心とした構成となっている。事実教授のテーマは“時間と歴史”、“社会と政治”、“空間”、“自然”、“技術”からなる。歴史教育に関するのは、“時間と歴史”である。“時間と歴史”では時間意識と歴史意識と個性を関連づけて発展することが主眼とされる。初等段階では、時間意識を獲得することが基本であり、この時間意識が歴史的な時間次元と関連する中で、現在と過去と未来の理解に貢献する歴史意識へと発展していくとされる。そして、本カリキュラムでは、各テーマにおいて、認識獲得、コミュニケーション、判断と行為という3段階を経て、教科特有のコンピテンスの獲得が図られる。

本カリキュラムは、“時間と歴史”というテーマにおいて、これら3つの学習過程を経て、教科特有の観点から他者の考えも考慮した独自の決断や行為をなす個性を発展することで歴史意識の促進を意図している。

歴史科コアカリキュラムでは、内容に即したコンピテンスと過程に即した3つのコンピテンスが設定される。内容に即したコンピテンスは、テーマごとに子どもが獲得すべき専門的知識を示す。この知識は過程に即したコンピテンスを育成するための基盤に位置づく。解釈と熟考コンピテンスは、歴史意識を促進するためのコンピテンスである。方法コンピテンスは、解釈と熟考コンピテンスの育成のために活用する史資料やメディアの扱い方に関する能力で、歴史意識を促進する歴史文化に該当する。コミュニケーションコンピテンスを基盤に、自らの歴史解釈を表現する語り能力を意味する。

本カリキュラムでは歴史意識の発展が目標とされ、歴史文化に基づいて歴史意識を下部意識ごとに促進し、子ども自身が歴史を語る歴史教育が意図されている。

事実教授では、2学年段階修了時には歴史意識の基盤となる時間意識を、4学年段階修了時には時間意識や歴史性の意識の育成が図られる。歴史科では事実教授で育成した歴史意識を2学年段階ごとに累積的に発展さ

せている。これより、ニーダーザクセン州コアカリキュラムでは、歴史意識の下部意識において育成すべき能力が2学年段階ごとにコンピテンスとして具体化して明示されることで、初等段階と中等段階の接続が可能になっていると考えられる。

事実教授・歴史科コアカリキュラムでは、歴史意識の育成を目標としてその育成のためにコンピテンスが設定され、初等・中等両段階の接続は歴史意識を中核としてコンピテンスを通してなされている。これより、ニーダーザクセン州コアカリキュラムにおける能力枠は歴史意識によって規定されるコンピテンス、到達水準は2学年段階修了時ごとに到達することがめざされる各コンピテンスのレベルであると判断した。

ヘッセン州事実教授・歴史科教育スタンダードの分析

事実教授教育スタンダードはコンピテンスを中心とした構成となっており、世界を“社会と政治”、“自然”、“空間”、“技術”、“歴史と時間”という内容領域で捉える。歴史教育に関する内容領域である“時間と歴史”では歴史意識の育成が図られている。内容領域では、認識獲得、コミュニケーション、評価という3段階を経て、コンピテンスを獲得することがめざされる。本スタンダードでは、“時間と歴史”において、3つの学習過程を経て、世界を自らの視点で捉え、社会において自己決定的に行動するための歴史意識の発展が図られている。

歴史科教育スタンダードでは、歴史意識の発展が目標とされる。歴史意識や語り能力を育成するために、“時間における継続性と変動性の認知コンピテンス”、“時間における継続性と変動性の分析コンピテンス”、“時間における継続性と変動性の判断コンピテンス”、“時間経験のための方向性コンピテンス”というコンピテンスが設定される。そして、これらコンピテンスのどの段階においても形成される語りコンピテンスがメタコンピテンスに位置づけられる。“時間における継続性と変動性の認知コンピテンス”では、日常における歴史的次元や歴史文化の要素を認識し、設定した問題の解決方法を探っており、歴史文化に基づいて歴史への問いを自ら設定する能力といえる。“時間における継続性と変動性の分析コンピテンス”では、歴史文化としての多様な史資料を活用して歴史への問いを解決するために過去の社会を分析しており、歴史文化を活用して過去の社会を再構築する能力と考えられる。“時間における継続性と変動性の判断コンピテンス”では、再構築した過去の社会を教科特有の次元やカテゴリーから検討し、過去の社会を判断しており、このコンピテンスは、歴史意識の社会的次元を活用して過去の社会の継続性や変動性を捉え、評価する能力と捉えられる。“時間経験のための方向性コンピテンス”は、

自らが行ってきた過去の社会に対する問題設定、再構築、評価を熟考し、批判的に捉え、それらを規準に現在や未来の世界や社会の方向性を考察する能力と思われる。

歴史科教育スタンダードでは、歴史意識の歴史的次元や社会的次元に基づき、過去の社会を認知、分析、判断し、その判断規準を基盤として現在や今後の社会を考察することで歴史意識を発展する歴史教育がめざされていると考えられる。

事実教授・歴史科教育スタンダードでは、歴史意識の育成が目標とされ、その育成のためにコンピテンスが設定されている。歴史科教育スタンダードでは子どもに期待されるコンピテンスが事実教授の4学年段階修了時、9/10学年段階修了時に分けて示されており、初等段階と中等段階の接続が明確に考慮されている。事実教授で育成した歴史意識の歴史的次元は、歴史科の10学年修了時には全学習過程において社会的次元も含めて育成され、歴史意識は累積的に発展している。これよりヘッセン州教育スタンダードでは、歴史意識で育成すべき能力が事実教授と歴史科の最終学年段階ごとにコンピテンスとして具体化して明示されることで、初等段階と中等段階の接続が可能になっている。

以上から、ヘッセン州教育スタンダードにおける能力枠は歴史意識によって規定されるコンピテンス、到達水準は4学年と10学年段階修了時に到達することがめざされる各コンピテンスのレベルであるといえよう。

学会版事実教授・歴史科教育スタンダードの分析

事実教授学会は1999年に、ヘルムート・シュライヤー会長(当時)の発議により、学会として事実教授スタンダードの作成に着手した。この学会版教育スタンダードは2002年の年次大会総会で承認を受けた後、同年6月に出版された。しかし、学会版教育スタンダードが作成されたのは、KMKスタンダードが決議された2003/04年以前であったため、KMKスタンダードの構成コンセプトをふまえ、学会版教育スタンダードに一部修正を加える必要に迫られた。

ここでの分析対象は、ドイツ事実教授学会が2002年版の改訂版スタンダードと位置づけた2013年版事実教授スタンダードである。新しい学会版教育スタンダードは、社会学、自然科学、地理、歴史、技術の5つの展望の相関による複合的構成を採り、歴史教育に関わるのは歴史の展望である。本スタンダードの歴史の展望においては、一次的には歴史的思考力の育成を学習目標に据え、二次的には歴史意識の涵養をめざす。そして、歴史の展望特有のコンピテンスを、歴史の問題設定コンピテンス、事象コンピテンス、方法・メディアコンピテンス、歴史のナラティブ・コンピテンス、オリエンテーション・コンピテンスとしたうえで、基礎学校児童の学習前提や

関心、事実教授の制約、歴史学習の接続を考慮して、問題設定コンピテンス、方法・メディアコンピテンス、ナラティブ・コンピテンスに絞り、促進を図るべきであるとされる。

歴史の問題設定コンピテンスは、当時の人間の共同生活の変化について、歴史の事実を捉えて問題を設定するものである。歴史の方法コンピテンス/メディアコンピテンスは、ふさわしいメディアを認識し、これらから歴史的な意味を抽出することである。歴史のナラティブ・コンピテンスは、過去の時代の断片的な伝承を紡ぎ合わせ、間主観的で検証可能な語りを形成する力のことである。

これより、歴史の展望においても、能力枠としてコンピテンスが設定されていることが分かる。本スタンダードは、歴史学習における能力枠としてのコンピテンス、その到達水準を明示化しているのである。

学会版歴史科教育スタンダードは、ドイツ歴史教師連盟が2006年に作成し、2011年に改訂している。本節では、旧版を2006年版、新版を2011年版と呼び、区別する。2006年版では他教科との協同のもとでのより深化した歴史的思考を子ども自身が行い、それによりアイデンティティを自ら形成させることが歴史科の意義となった。2006年版は、この意義を達成できるように子どもが歴史に取り組み、歴史を形成する主体的な歴史学習へと変革しようとする構成主義型の歴史学習観に則っている。コンピテンスとしては、事象コンピテンス、解釈と熟考コンピテンス、メディアと方法コンピテンスに分けて到達点を記述する。事象コンピテンスでは各単元の具体的内容、さらにそれを子どもがどのように扱うことができるかを示すことが中心となっている。解釈と熟考コンピテンスは、「歴史認識の構造における基本的洞察から、概念や調査方法の扱いを経て、独自の解釈の形成や歴史解釈の批判的分析へと続く」という3つの過程で育成するとされる。2学年段階ごとの各下部コンピテンスの到達水準を明示し、その達成を図ることで、歴史的思考を通して歴史意識の育成が試みられる。メディアと方法コンピテンスは、歴史的思考にとり不可欠なメディアや学習方法とはどのようなもので、それにどのように取り組めば歴史的思考を育成できるかを示しており、2学年段階ごとに到達度が明示される。

2006年版は歴史的思考を通して歴史意識を育成するという目標を設定し、その達成のためにどのような歴史学習をすべきかをコンピテンスにより学習内容・学習過程・学習方法に分けて示した学習指導要領であり、コンピテンスが能力枠として機能していることが分かる。

2011年版はドイツ歴史教師連盟(VGD)に委託された活動サークル(AK)が検討し、2010年の歴史家大会での議論を経て、提出された改訂版である。2006年版と大きく異なる点が2つある。第1は、2006年版では歴史意識の

育成という歴史科の目標は直接的には論じられていなかったのに対し、2011年版では歴史科の目標は歴史コンピテンス、つまり、歴史意識と語りコンピテンスであると明示されている点、第2は、2006年版は前期中等段階を2学年ごとの3段階に区分し、各段階で到達度を提示していたのに対し、2011年版は基礎レベルと発展レベルの2段階で到達度を示している点である。2011年版では、歴史意識と語りコンピテンスを育成するために事象コンピテンス、解釈と熟考コンピテンス、方法とメディアコンピテンスが設定される。

事象コンピテンスで「歴史的状况や歴史文化的関連を認識し、時間と空間に配列する」、解釈と熟考コンピテンスで「歴史的状况ないし歴史文化的関連を解釈し、判断する」、方法とメディアコンピテンスで「歴史的認識、解釈、判断を獲得するための活動方法とメディアを活用する」ことがめざされる。

2011年版は、明確な目標のもとでコンピテンスや到達水準を設定することで、学校教育現場における構成主義歴史学習を具体化する道筋を明らかにする。学会版の事実教授・歴史科教育スタンダードは異なる学会が作成しており、両教育スタンダード間の接続が考慮されているわけではない。また、事実教授は統合教科であり、歴史は5つの展望の1つに過ぎない。さらに、事実教授は学問中心カリキュラムの論理に則った歴史科とは異なり、子ども経験世界の重視という児童中心主義の論理という二極の牽引関係にもある。この点を留保しつつ、両教育スタンダード間の接続を検討しなくてはならないのである。これより、両教育スタンダードを接続という観点から捉えることは困難を伴うわけであるが、とはいえ、接続を考慮できないわけではない。それは、両教科において2点の重要な共通性がみられるからである。第1は、両教科ともに歴史意識の育成を目標として設定している点である。第2は、両教科ともに能力枠と到達水準を設定している点である。

これら2点の共通点は互いに関連しあっている。構成主義歴史学習観のもとでは、歴史意識と語りコンピテンスは密接に関連づけられる。歴史意識の構造化において最もコンセンサスを得ているパンドルは、7つの各意識は個人の精神構造において相互に関連づき、個人内での意味形成過程を通して、各自が自分の言葉で歴史を語ることをもたらすとし、歴史意識を語りコンピテンス、つまり、歴史を語り理解する能力であると論じた。両教科において子どもが主体的に歴史を語ることで歴史意識の育成が図られる。そして、その育成を保証するために、事実教授では歴史の問題設定コンピテンスで歴史の事実を捉え問題を設定し、その問題を考察するために、情報源を探して活用し、それが自身の問題を考察する上で有効かどうか判断し、吟味するために歴史の方法/メディアコンピテンスを活用し、それによって考察したことを

歴史のナラティブ・コンピテンスで語るのである。歴史科では、事象コンピテンスで歴史的事象から歴史解釈を獲得し、メディアと方法コンピテンスでその歴史解釈の妥当性を吟味・検証し、解釈と熟考コンピテンスで自らの形成した歴史解釈を表現するのである。両教科のコンピテンスにもかなりの共通性がみられる。事実教授では歴史の問題設定コンピテンス、歴史科では事象コンピテンスとなっている点異なる点であるが、これは、子どもの経験世界を重視する事実教授では身近な環境と歴史との関わりを経験的に捉えることで歴史の考察を始めるのに対し、歴史学の論理を重視する歴史科では歴史学の成果である歴史解釈から歴史の考察を始めるという相違に起因すると考えられる。この相違は両教科の拠って立つ教科原理によるものであり、コンピテンスとしてめざすものには相違はない。

以上から、両教科はともに歴史意識と語りコンピテンスの育成を図るために、共通性の高い能力枠と到達水準を設定しているのである。これより、学会版事実教授教育スタンダードと学会版歴史科教育スタンダードにはめざす目標、能力枠、到達水準ともに共通性が高いために、両教育スタンダードを接続することは可能であると判断できよう。

これまで分析してきたいずれの学習指導要領においても歴史意識の育成という目標のもと、コンピテンスという能力枠とその到達水準を設定しており、この目標と能力枠と到達水準の設定が初等段階と中等段階の接続を可能にしていることをみてきた。これら3つが初等段階と中等段階の接続を可能にする要件であることが明らかとなった。

(3)総括

本研究では、ドイツにおける近年の教育改革から学力観を考察し、その学力観のもとで作成された学習指導要領を検討することで、ドイツでは初等段階と中等段階を接続するカリキュラムをどのように構築しているかを明らかにすることをめざした。

本研究における研究の意義は以下である。第1は、ドイツにおけるカリキュラムの再編を教育改革の視点から明らかにした点である。ドイツの歴史科カリキュラムのみを検討するのではなく、評価管理型の手法の定着を図る教育改革全体の枠組みから歴史科カリキュラムを検討している。

第2は、事実教授の歴史的展望や歴史科においてめざすべき目標が歴史意識の育成であると確定した点である。事実教授の歴史的展望や歴史科における目標が歴史教育学という理論レベルから各州や学会版学習指導要領といった実践レベルに至るまで歴史意識の育成であることを明らかにした。

第3は、ドイツのカリキュラムにおいては、コンピテンスが能力枠として機能していることを示した点である。ドイツでは、教育改

革に基づいて作成された教育スタンダードから各教科の学習指導要領に至るまでコンピテンスが設定され、教育目的の達成が保証されていることを究明した。

第4は、能力枠としてのコンピテンスの到達水準が明示化されていることを提示した点である。各州や学会版学習指導要領においていずれも生徒ができるようになるべき到達水準が明記され、教育目的の達成がより具体化されていることをみてきた。

第5は、歴史意識の育成という歴史科の教育目的、コンピテンスという能力枠、到達水準が初等段階と中等段階の接続を可能にする要件であることを解明した点である。これら3要件が有機的に機能することで各学習指導要領において両段階の接続が実現されていることを検討した。

以上の意義から、日本における初等段階と中等段階を接続する歴史スタンダード・カリキュラムの開発に向けた展望を考察することが可能となる。日本では、「社会認識を通して市民的資質を育成する」という社会科全体の教育目的はあるが、歴史的分野独自の教育目的は設定されていない。この独自の教育目的が設定されていないことが、歴史スタンダード・カリキュラムの開発を困難にしているのである。社会科全体の教育目的は究極目的であり、カリキュラム開発において実質的に機能しない。この教育目的は、究極目的であるために、その実現に向けたコンピテンスや到達水準を設定することはできないからである。歴史的分野限定で、具体的に達成可能な教育目的があることで、能力枠と到達水準を設定することが可能となるのである。

これより、歴史スタンダード・カリキュラムを開発するためには、日本においても歴史的分野独自の教育目的、コンピテンスという能力枠、到達水準を設定することが急務の課題であり、これこそが本研究の結論である。

<引用文献>

原田信之編著、確かな学力と豊かな学力、ミネルヴァ書房、2007年

Pandel, Hans-Jürgen: Geschichts-Unterricht nach PISA. Kompetenzen, Bildungsstandards und Kerncurricula. Wochenschau Verlag 2006

Niedersächsisches Kultusministerium: Kerncurriculum für die Grundschule Schuljahrgänge 1-4 Sachunterricht. 2006

Niedersächsischen Kultusministerium: Kerncurriculum für das Gymnasium Schuljahrgänge 5-10 Geschichte. 2008

Hessisches Kultusministerium: Bildungsstandards und Inhaltfelder. Das neue Kerncurriculum für Hessen Primarstufe Sachunterricht. 2011

Hessisches Kultusministerium: Bildungsstandards und Inhaltfelder. Das neue Kerncurriculum für Hessen Sekundarstufe

Gymnasium Geschichte. 2011
Gesellschaft für Didaktik des Sachunterrichts (Hrsg.): Perspektivrahmen Sachunterricht, vollständig überarbeitete und erweiterte Ausgabe. Verlag Julius Klinkhardt 2013

Verband der Geschichtslehrer Deutschlands (Hrsg.): Bildungsstandards Geschichte Rahmenmodell Gymnasium 5.-10. Jahrgangstufe. Wochenschau Verlag, 2006
Verband der Geschichtslehrer Deutschlands (Hrsg.): Bildungsstandards Geschichte - Rahmenmodell Gymnasium 5.-10. Jahrgangstufe. Wochenschau Verlag 2. unver. Aufl. 2010

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

原田信之、ドイツの統合教科「事実教授」の新スタンダード - 初等教育段階の歴史学習に着目して -、名古屋市立大学大学院人間文化研究科編、人間文化研究、査読無、20号、2014、47-65

<http://id.nii.ac.jp/1124/00000683/>

宇都宮明子、原田信之、歴史意識の連続的形成を図る小中接続研究 - ドイツ教科書の分析をもとに -、日本教科教育学会編、日本教科教育学会誌、査読有、2016、39号1巻、未定

<http://jcrda.jp/backnumber4.html>

〔学会発表〕(計3件)

宇都宮明子、初等段階と中等段階の接続の観点に基づく歴史教育の考察 - ドイツ歴史教育をてがかりに -、全国社会科教育学会、2013年11月9日、山口大学

宇都宮明子、原田信之、歴史意識の連続的形成を図る小中接続研究 - ドイツ教科書の分析をもとに -、日本教育方法学会、2014年10月11日、広島大学

宇都宮明子、原田信之、時間学習を通じた歴史意識の育成 - ドイツの事実教授の教科書分析に基づいて -、日本教科教育学会全国大会、2015年10月25日、広島大学

〔図書〕(計1件)

宇都宮明子、原田信之、コンピテンスを専門学年に配置した歴史スタンダード・カリキュラムの開発研究成果報告書、古川総合印刷、2016、全127頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇都宮明子 (UTSUNOMIYA Akiko)

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号: 40611546

(2) 研究分担者

原田信之 (HARADA Nobuyuki)

名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号: 20345771